



## 地域研究特講（欧州）

2019年10月31日



担当 入稻福 智

11月1日は、キリスト教の全ての殉教者・聖人たちを弔う日で、万聖節（Aller Heiligen）と呼ぶ。なお、キリスト教の発展・普及に関する貢献や生前の善行に基づき、死者を「聖人」として讃えるのは（ ）のみである。つまり、キリストの教えのみを信仰の対象とするプロテスタントでは聖人を尊ぶことはないし、11月1日を祝日としていない。

プロテスタントは、（ ）年10月31日、つまり、万聖節の前日、ドイツの（ ）が教会に（ ）を掲示し、当時の教会を批判することで始まった（ ）改革に端を発し、成立した宗派であるが、現在、ドイツの北部や北欧で広く信仰されている。これらの国や地域では、11月1日は祝日ではない。他方、（ ）が広く信仰されている南ドイツ（例えば、バイエルンやザールラント）、オーストリアや南欧（例えば、 ）では祝日である。

翌11月2日は、万霊説であり、全ての死者を弔う日となっている。そのため、11月1日から2日かけてヨーロッパでは墓参りをする人が多いが、この習慣は、ケルト人（ヨーロッパの先住民族。ハルシュタットには彼らの初期鉄器時代の文化が残っている）の習慣に起源を発するものらしい。

古代ケルト人は、ドルイド教（Druids とは司祭／予言者などの知識階級）を信じていたが、彼らの暦では11月1日が1年の始まりとされ、新年の11月1日は Samhain （ケルト語で「夏の終わり」の意味。サムウェイン）と呼ばれていた。夏が終わりを迎え、次第に暗く寒くなっていくこの季節に、恐ろしい災いを引き起こす神々が人間の前に現れると信じられていた。そして大晦日の10月31日に、死者の魂が地上に戻り、悪霊や魔女が彷徨い、その魂を宥めるため、人々は食べ物を捧げものをしたり、かがり火を焚いて悪霊を追い払わなければならないと信じていた。

このケルトの風習に文化に、古代ローマの果実の女神 Pomona の祭が融合し、さらにキリスト教の要素も加わる。つまり、キリスト教のすべての聖人と殉教者を祝うこの11月1日の（ ）は、8世紀にはじまったとされる。同様に、クリスマスの風習も、古ゲルマン人の祝日であったものを、キリスト教化される過程で同じ日をキリスト教式に祝いだしたとされる。

---

ケルト人は、古代、ヨーロッパの中部と西部に住み、ローマ人がガリア人と呼んだ人種である。鉄器時代（紀元前800年頃）、南ドイツのバイエルンおよびボヘミアあたりが原住地と推定される。前4世紀にはイタリア半島のエトルリア人居住地域に定住し、前390年頃、一時、ローマを略奪した。その後、前2世紀中頃までローマ人と争うが、敗北した。また、ガリア地方もケルト人の居住地域であったが、ローマ人に制圧された。そのため、ケルト人は、ローマ人に追われるように、ブリテン島やアイルランド島へと移動した。